

7月8日、初登庁する宮坂尚市副町長。およそ120人の町民や町職員が役場庁舎前で出迎えた



# 「心に豊かさを実感するまち」 「子どもの笑顔がはじける未来」 を目指して努力

宮坂町長就任のあいさつ

この度の町長選挙において、町民の皆様から温かいご支援をいただき、町政執行の重責を担うこととなりました。身に余る光栄であります。先達の使命の重大さに身の引き締まる思いです。先達の艱難辛苦に思いを馳せながら、国民の暮らしや命を守る農業と自然環境に恵まれた郷土厚真のさらなる発展を願い、全町民の生活安定と次世代の育成のために懸命の努力をしまいにまいりますので、町民各位のご理解とご協力を心からお願ひ申し上げます。

北海道は今、世界経済の荒波に翻弄されさまざまな困難に直面しています。WTOにおける多角的貿易交渉や飼料・肥料・燃油の高騰など、農業や漁業などの一次産業を取り巻く環境はますます厳しさを増し、長引く景気低迷と少子高齢化により、道内経済はその活力を失いつつあります。かつて税源が豊かであった本町も、町税の減少が続く、財政規模の縮小を余儀なくされており、基幹産業である農業の再興と人口対策はこれまでに以上に急がれています。

少子化・人口減は全国的な傾向ですが、それだけに、自治体間の施策競争が激化しています。「通勤圏にあると言っても、こんな不便なところに若い人は来ないよ」という声もありますが、昼間の人口が夜間の人口に比べて多いのは、都市部から厚真町へ通勤をしている人の多さを表しています。このような方々の本町への定住と、本町から近隣市町への通勤圏としての定住を促進してまいります。また、若い世代が求める住宅も不足しており、低廉な宅地の提供も併せて考えていく必要があります。

子育て世代に都市部が便利であるというのは錯覚で、子育てのしやすい環境を求めて、都市部から周辺町村に移住する人も徐々にではありますが増えています。本町にも既に札幌から苦小牧町民との対話を大切にし、みんなの底力を結集する工夫を行い、地域力を高めていくことが重要であると考えています。

私は、もとより微力ではありますが、守りと攻めのバランスと町民の視点に立った町政を基本姿勢として、「いのち満ちる農の里あつま大いなる田園の町」をモチーフに、「心に豊かさを実感するまち」「子どもの笑顔がはじける未来」を目指して努力してまいります。

結びになりますが、町政発展に尽くされた藤原前町長をはじめとした先輩諸賢のこれまでのご努力に深く感謝を申し上げます、就任のごあいさつと致します。

ヘクタールの農地は、110年を超える歳月をかけて育ててきたかけがえのない宝であり、厚真町の源でもあります。やる気と底力を結集して、地域に元氣と自信を取り戻したいのです。

厚真町は、温暖な気候と景観に恵まれた北部山岳ゾーン、厚真川や支流域に広がる肥沃な農業ゾーン、苦小牧港東港を抱える企業誘致適地の臨海ゾーンとその懐の深さが魅力です。これまでに、大勢の方が移住してきたルーラルビレッジは、その訪れる方々から地の利と自然の豊かさをギャップに驚嘆の声をいただけてきました。厚真町のすばらしい風土を生かし、若いも若きも手を携えて暮らしていけるそんな町を未来に残したいと考えています。

自然や人へのいたわりと地域への拘りを大切に、無いものねだりからあるもの探しへと立ち位置を変えて、本町の地域特性を生かした大いなる挑戦を行ってまいります。そのためにもまずは、

への転勤を機に、厚真町の子育て環境と自然環境の良さに惹かれ定住を決められた若い夫婦がいます。この様に、子育て支援の充実、少子化対策でもあり、若い世代の定住対策にも繋がります。

また、企業誘致や雇用相談などの雇用対策も積極的に行っていかねばなりません。オエノンホールディングスや国際コンテナターミナルの苦小牧港東港への進出が続く、臨海ゾーンの可能性を改めて示すものとなりました。後背地の上厚真地区の環境整備や苦小牧経済界との連携を図り、情報収集とセールス活動を強化し、地の利や環境の良さをアピールしてまいります。

福祉に関しては、皆さんがこれからも自分らしく生き生きと暮らしていただけるよう、必要な福祉水準を堅持し、さらに情報通信基盤の活用や循環バスも含めた地域公共交通の統合整理、ホームヘルプサービスなどの充実を図ってまいります。農業振興については、市場経済優先で生産効率一辺倒に追い立てる農政と自己完結型農業を追求してきた本町農業の現実、大きなギャップが生じています。危機感を共有する経営者がしっかりと議論していただき、営農ビジョンの策定やモデルケースを育成するなどさまざまな支援を行っていく必要があります。

また、生産物の品質向上により、本町農業の価値が消費者に見直される努力を継続していかねばなりません。

付加価値の創造や理想とする経営体への転換、新規就農者など多様な担い手の育成など、その先進的な取り組みに対して、関係機関上げでの支援が必要です。

3,500ヘクタールの水田を含む4,800

初登庁後、職員を前に訓示を述べる宮坂町長



宮坂尚市副町長  
(みやさかしょういちろう)

昭和31年厚真町生まれ。室蘭工業大学工業化学科卒。ホクレン農業協同組合連合会勤務を経て昭和56年町職員に。財政税務課課長補佐、総務課参事などを歴任。妻保子さん、大学生と高校生の2人の息子さん、母親の5人家族。趣味はスポーツ(野球、羽球、スキー)、スポーツ観戦など。厚和地区在住。52歳